

目 次

添 付 資 料

添付資料 1 審議の経緯	175
添付資料 2 原子力分野の研究開発に関する委員会 構成員	176
添付資料 3 原子力研究開発作業部会 構成員	177
添付資料 4 2015 年までの研究開発計画 —主概念：ナトリウム冷却炉—	178
添付資料 5 2015 年までの研究開発計画 —主概念：先進型式炉再処理+燃素化ペレット炉燃料製造—	205
添付資料 6 GIP と実用化戦略調査研究の設計要求の比較	225

添付資料1

審議の経緯

1. 原子力分野の研究開発に関する委員会

- 第14回 平成18年3月30日
 第15回 平成18年4月26日
 第16回 平成18年5月25日
 第18回 平成18年6月23日
 第19回 平成18年7月21日
 第20回 平成18年8月25日
 第21回 平成18年9月12日
 第22回 平成18年10月31日

2. 原子力研究開発作業部会

- 第5回 平成18年4月14日
 第6回 平成18年4月27日
 第7回 平成18年5月12日
 第8回 平成18年5月24日
 第9回 平成18年6月2日
 第10回 平成18年6月14日
 第11回 平成18年6月19日
 第12回 平成18年7月3日
 第13回 平成18年7月19日
 第14回 平成18年8月4日
 第15回 平成18年8月17日
 第16回 平成18年9月6日
 第17回 平成18年10月26日

原子力分野の研究開発に関する委員会 構成員

- 石田 寛人 金沢学院大学長
 伊藤 篤久 電気事業連合会専務理事
 井上 信 京都大学名誉教授
 横田 洋一 名古屋大学エコトピア科学研究所部門長
 同崎 俊雄 独立行政法人原子力機構副理事長
 加藤 正進 財団法人電力中央研究所常務理事
 木下 富雄 財団法人国際高等研究所フェロー
 小林 英男 横浜国立大学安心・安全の科学研究教育センター教授
 (主査)田中 知 東京大学大学院工学系研究科教授
 知野 恵子 読売新聞東京本社編集局解説部次長
 中西 灰子 東京大学大学院農学生命科学研究科教授
 早野 敏美 社団法人日本電機工業会専務理事(第18回より)
 藤本 弘次 社団法人日本電機工業会専務理事(第17回まで)
 松田 美夜子 富士薬業大学環境防災学部教授、
 生活環境評論家(廃棄物とリサイクル)
 本島 修 自然科学研究機構核融合科学研究所長
 和氣 洋子 康應義塾大学商学部教授

添付資料 3

原子力研究開発作業部会 構成員

榎田 洋一 名古屋大学 エコトピア科学研究所
環境システムリサイクル科学研究部門長

柴田 洋二 社団法人日本電機工業会 原子力部長

代谷 誠治 京都大学原子炉実験所長

(主査) 田中 知 東京大学大学院工学系研究科 教授

田中 治邦 電気事業連合会 原子力部長

前川 治 株式会社東芝 電力システム社 原子力技術部長
(第8回より)

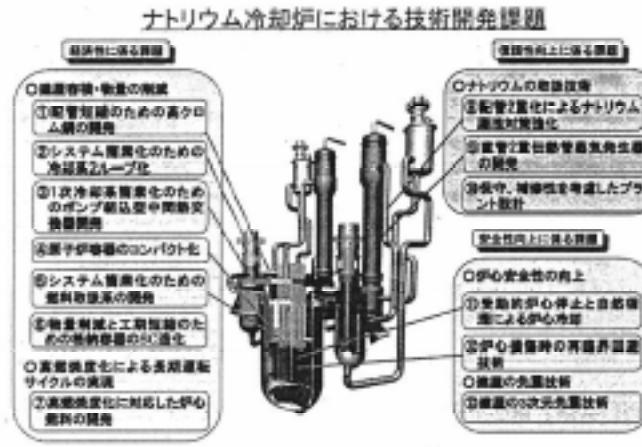
山中 伸介 大阪大学フロンティア研究機構 副機構長

添付資料 4

2015年までの研究開発計画
— 主概念:ナトリウム冷却炉 —

2015年までの原子炉システム設計研究の進め方





ナトリウム冷却炉における技術開発課題

中国古典文学名著

- ナトリウムの物理性質
 - 電離度変化によるナトリウム濃度対照法
 - 電離度変化と酸素発生との関係
 - 吸着・捕獲性を考慮したプロセス

第五章网上三晋总纲

- ① 慢動的伊吹心停止と自然復興による伊吹心再発
② 伊吹心発作時の有酸素血症

②発動的停心停止と自然原因による停心死因
③停心癒復時の有應界限

◎徹底の効率技術

- 10

10 of 10

ナトリウム冷却炉に採用する革新技術の研究開発全体会計画

主概念・ナムリウム冷却器

実用炉の設計研究

これまでの設計研究成果

○実用目標を実現レベルで実現する可能性を有する実用炉概念を開発した。
○実現しないプラント概念の優越性を評価し、成績性を最終見直し可能にできた。
今後の設計研究の課題
<p>①実用炉の概念設計と基本設計 実用炉の概念設計として、サルト炉材、炉心・燃料設計、炉管設計、構造設計、システム設計、安全設計、等を実現し、その技術的成就是見出された。</p> <p>②技術技術を適用したプラント概念設計(～2010年) 実用技術を適用する技術と設計している技術(圧縮機50t/h、3～4t/hブロッカ設置、大型炉心炉材部、後冷却器、後冷却器部等)を実現する。</p> <p>③技術開発成績のブリード設計への反映 2006年頃から日本と欧州で開発されている実用炉技術開発の成果が得られる。これらを成績を反映したプラント概念を開発し、2010年に実現される実用技術を考慮して、技術的成就是見出される。</p>
技術開発の趣旨
<p>・プラント設計・主要目設計、系路設計、計画設計、配管設計を実現。既に設計データに基づいてプラント設計を評価する。 炉心・燃料設計、設計標準に適合する炉心及び燃料設計を実現し、サイクル全体評価ためのデータを得る。</p> <p>・機器設計 各主要機器の設計を実現する。特に、操作性に課題のある機器は設計時に詳細設計を実現し、動作平順を実現する。</p> <p>・構造設計：構造物設計に対する健全性を評価し、健全性確認を実現する。</p> <p>・システム設計：システム特性、設計基準に基づき評価し、システム成就是見出される。</p> <p>・安全設計：設計基準を、設計基準に基づき評価し、安全成就是見出される。</p> <p>・研究開発成績の反映：原子炉炉心炉材部、大口径炉心炉材、ガラス炉心炉材、高炉2重管型高炉炉心部等、技術開発を適用したプラント設計、技術技術を適用したプラント概念を開発し、技術的成就是見出される。</p>

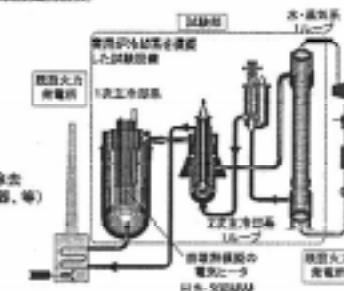
実証試験計画の立案・大型試験施設及び実証炉の概念構築(1/3)

これまでの設計研究成果

○実用技術及び機器レベルで研究開発をすすめ、技術実証方略を立案した。
○実用炉の概念として50MWtの炉心炉材部の設計開発を実現し、技術的成就是見出された。
今後の設計研究の課題
<p>①実用炉炉心炉材部の実現 各主要機器の設計を実現する。実用炉炉心炉材部を実現する。</p> <p>②大型試験施設の概念化 上記の実用炉炉心炉材部に基づき、大型試験施設の概念を開発する。</p> <p>③実証炉の実現設計 2010年に実証炉プラント実現概念を実現することを目的として、ブリード概念を開発する。</p> <p>○実証炉の概念設計(2011年～) 実現された実証炉概念について設計状況を実現し、設計許可申請書(送付ハハ)、(プラント概念設計)及び送付ハハ(安全評議会に記載できる技術レベル)を提出。</p>
技術開発の趣旨
<p>①実証試験炉概念の確定 ○実証試験炉概念の確定：各実証技術について、最適な実証方針を確定する。 ・水蒸気炉材・ナトリウム炉材・モルタルアーリング・大型試験施設による実証試験・実証炉を用いた技術実証 ○炉材スケールの実現：各実証技術について、試験スケールを含む実証スケールを実現する ・大型試験施設・実証炉 ②大型試験施設の主要目確定 ○大型試験施設の主要目確定：実証試験計画に基づき、大型試験施設への要求条件を整理し、主導面を確定する。 ○大型試験施設の基準標準：定義した主要目に基づき、検査規格を計画する。</p>

実証試験計画の立案・大型試験施設及び実証炉の概念構築(2/3)

大型試験施設による実証試験構造(案)

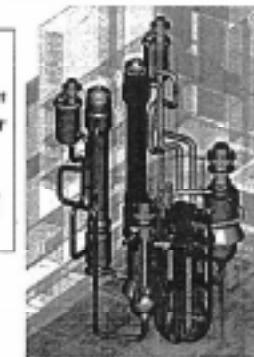


大型試験施設概念の一例

実証試験計画の立案・大型試験施設及び実証炉の概念構築(3/3)

技術開発の概要(つづき)

②実証炉炉心炉材部の概念 ○プラント炉心炉材の概念 <ul style="list-style-type: none"> ・実証技術による炉心炉材内炉心を含め、大型炉プラントに必要なスケール、性能、システム等を実現する。 ・炉心・燃材に適用する技術開発項目を考慮し、機器スケールを炉材炉心炉材設計 ○大型試験施設の炉心炉材部 <ul style="list-style-type: none"> ・各種炉材及び炉材に上り、プラント炉心炉材の技術的追進性を実現する。 ・革新技術の実証開発概念を実現し、炉心炉材概念を最適化 ・建設コスト・運転コストを評価する。
○実証炉炉心炉材部 2010年の実証炉炉心炉材部の概念化と、実証炉炉心炉材部の成績を踏まえて、プラント炉心炉材部の実現設計、技術許可申請書、設計書類ハハ、(主導面)に記載する実証炉炉心炉材部の概念を開発する。



実証炉の例

設計研究に関する2010年の成果

●採用する革新技術の決定

革新技術の研究成果を実用炉設計に反映し、その技術的実現性と代替技術を用いた実用炉設計への影響を比較評価し、採用する革新技術を決定する。

- ▶ 冷却系ループ化、ポンプ駆動型FBR、原子炉容器コンパクト化、直管二重管型蒸気発生器、高燃度化炉心燃料、等

●実用炉の概念設計

実用ナトリウム冷却炉の概念設計として、以下を実施し、その技術的成立性を見極める。

- ▶ プラント設計、炉心・燃料設計、機器設計、構造設計、システム設計、安全設計

●大型試験施設を用いた実証試験計画の立案

革新技術の技術実証方策を検討し、技術実証計画を立案する。

- ▶ 実証試験項目の選定
- ▶ 試験スケールの検討
- ▶ 技術実証計画のとりまとめ

●実証炉の予備的目標検討

技術実証計画と整合した実証炉プラント概念を提示する。

- ▶ プラント主要目的の選定
- ▶ プラント概念検討

革新技術	
高炉心上蓋	
冷却系ループ化	
ポンプ駆動型FBR	
原子炉容器コンパクト化	
直管二重管型蒸気発生器	
高燃度化炉心燃料	
炉心・燃料設計	
機器設計	
構造設計	
システム設計	
安全設計	
技術実証実験の実証	
炉心・燃料設計	
機器設計	
構造設計	
システム設計	
安全設計	
技術実証実験の実証	
炉心・燃料設計	
機器設計	
構造設計	
システム設計	
安全設計	



設計研究に関する2015年の成果

●実用炉の概念設計とその成立根拠となるデータの提示

- ▶ 2010年の革新技術の検査を反映した設計
- ▶ 実用化研究開発での要素研究成果を反映した設計
- ▶ プラント概念を最適化したデータ類(炉心性能評価、構造健全性評価、安全性評価、経済性評価、等)

●大型試験施設の設計・建設及び試験

- ▶ 大型試験施設の設計・建設を行う(2011～2014年)
- ▶ 大型試験施設を用いた技術実証試験を開催する(2015年)

●実証炉の概念設計

- ▶ 2010年の革新技術の検査を反映した設計
- ▶ プラント概念を最適化した設計
- ▶ 採用許可申請書:添付八(安全設計)及び添付十(事故評価)を記載できる技術レベルの達成

●実用化までの研究開発計画の提示

「もんじゅ」での研究開発に関する成果

2006年から実施する性能試験及びその後の本格運転を通じて、先端プラントとしての運転データを蓄積し、それに基づく成果を2015年度に成果を取りまとめる実用炉の設計研究に反映する。特に、性能試験で収集する試験データを用いた、炉心・構造、ナトリウム循環、システム等のFBRプラント設計手法の妥当性検証の実施や、機器部の試験結果での特性確認結果や問題・不具合等の収集を実現し、実用炉アーティファクトの実用化研究開発への適用を図る。

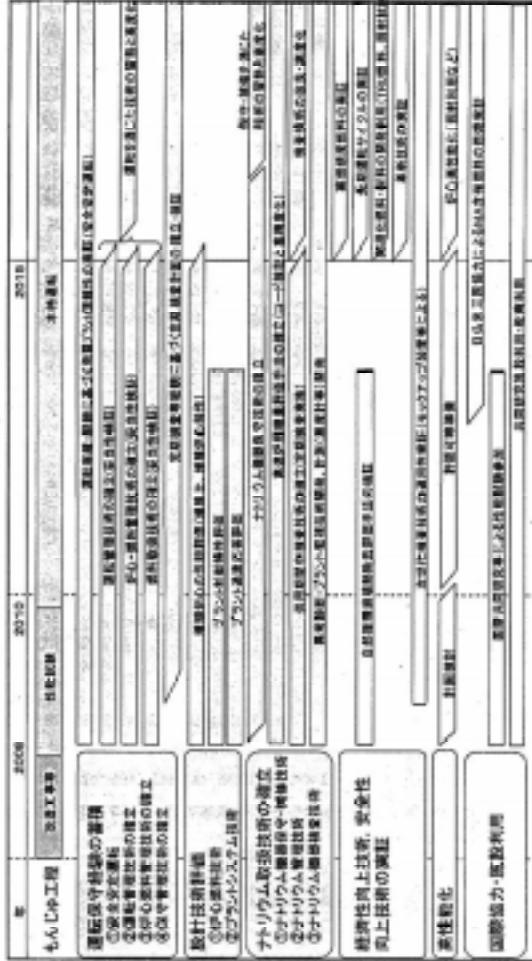
2010年度の成果：設計手法の妥当性検証
設計手法の妥当性検証のための性能試験データを取得するとともに、性能試験等データに基づいた検討を実施

**2015年の成果：先端プラントとしての妥当性実証：ナトリウム循環は確立運転・保守維持の実績による運転管理技術、炉心・燃料管理技術、燃料取扱技術等の確立(妥当性検証)
運転・保守維持を通じたナトリウム機器保守技術、高連続炉の供給制御中止・起動技術等の確立**

上記と並行して、FBR実用炉の経済性向上技術や安全性向上技術の実証を想定した、実用化燃料開発、燃料利用、長期運転サイクル実証などのための「もんじゅ」高性能化検討を行う。
国際研究開発協力拠点化に向けて、国際共同研究等の枠組みを利用した性能試験参加、もんじゅを利用したMA含有燃料燃焼実験試験等を実施する。

「もんじゅ」における研究開発計画

- もんじゅの運転保守技術に基づき、運転管理技術を確立、設計技術を評価、ナトリウム取扱い技術の検証を行った。
- 特に、性能試験では、安全機能では、安全機能の検査、運転データーによる設計技術評価を行った。



①配管短絡のための高クロム鋼の開発(1/2)

「もんじゅ」の規定

- 「もんじゅ」では、冷却系配管にステンレス鋼(JIS SUS304)を使用。
- 事故等による急停止時には、内部圧において一時的に炉心と航空機器付近の温度差が大きくなるが、こうした状況下での配管に加わる熱応力による破壊を避けるため、エルゴを多角設置したことで破裂が小さくなり、これが破裂の荷重拡大、機器重量増大を防いでいる。

技術開発の趣意

○実用炉では、特に高い強度が求められる遮熱発生器管材およびP管材に、高耐候性・遮熱塗膜をかつ高強度にも優れる高クロム鋼(12クロム系鋼)を使用することにより、機器コンパクト化と安全性の向上を図る。

○内部燃焼系には、万一配管が破損した場合に一気に大きな破断に至らないよう、特に高い延性(ねばり)が必要とされる。このため、従来のステンレス鋼に比べ熱膨張率が小さく、かつ適度な延性を有する高クロム鋼(9クロム系鋼)を使用することにより、配管の捻れを防ぎ、建設・保守コスト低減を図る。

○なお、これらの高クロム鋼は、最新鋭の火力発電炉等で使用実績あり。

今後の課題

○現在までに、材料試験のメド付時は完了。

○今後、ナトリウム環境中試験を含む長期の実験試験を実施し、材料性能の最適化のためのデータ、材料強度基準策定に必要なデータ、接種料等の設計に必要なデータ、長時間の耐久性評価に必要なデータ等を収集することが必要。

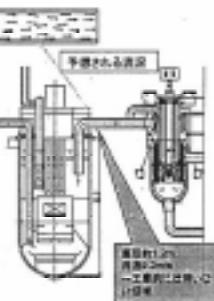
① 配管短絡のための高クロム鋼の開発 (2/2)

計画	2012	2014	開始時期
材料(鋼材)評議 ISO, JIS規格の確認 (1) 耐久性評価試験(2) 2012年 2013年	[開発目標と実現度]	[開発目標と実現度]	[実現目標と実現度]
耐久性評価試験(2) 2013年	[開発目標と実現度]	[開発目標と実現度]	[実現目標と実現度]
耐久性評価試験(2) 2014年	[開発目標と実現度]	[開発目標と実現度]	[実現目標と実現度]
高強度化 耐久性評価 2014年	[開発目標と実現度]	[開発目標と実現度]	[実現目標と実現度]
耐久性評価 2014年	[開発目標と実現度]	[開発目標と実現度]	[実現目標と実現度]
耐久性評価 2014年	[開発目標と実現度]	[開発目標と実現度]	[実現目標と実現度]
高強度化 耐久性評価 2014年	[開発目標と実現度]	[開発目標と実現度]	[実現目標と実現度]
高強度化 耐久性評価 2014年	[開発目標と実現度]	[開発目標と実現度]	[実現目標と実現度]

* : 2016年以降実験では最終段階データを記述する。

② システム簡素化のための冷却系2ループ化 (1/3)

「もんじゅ」の現状	
○「もんじゅ」では、電気出力282MWで冷却系が2ループあり、これが冷却系配管の容積増大、機器量の増大、設置面積の拡大を招いている。	
技術開発の経緯	技術開発の進捗
○実用炉においては、電気出力150MWで冷却系を2ループとし、ループ毎の機器を大型化することにより、システムを簡素化し、建設・保守コスト低減を図る。	
○2ループ化において、配管が大型化し、冷却材の流れも大きくなるが、これにより配管系の負担につながる運動や材料消耗が発生しないことを、実証試験等により確認することが必要。	→機器設計
今後の課題	
○現在までに、水を用いた実証試験により、確実につながる運動が発生しない見通しを得た。	
○今後、ナトリウムを用いた実証試験を行い、材料消耗が発生しないことを確認することが必要。	



② システム簡素化のための冷却系2ループ化 (3/3)

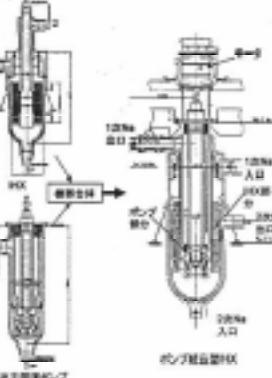
計画	現状	目標	備考
第2回LWR用内燃機の実証試験	実証試験実施	実証試験実施	実証試験実施による機器の運転実験を通じて、その機能性と実証結果を評価する。
電磁流動性評価手法の確立	実証試験実施	実証試験実施	ナトリウムによる電磁流動性評価を用いて、機器の運転特性を評価する。

② システム簡素化のための冷却系2ループ化 (2/3)

サ 案	2004	2005	実証試験
主力重油炉 冷却水の運送方法の検討 (冷却水の運送に伴う機器の簡素化)	実証試験実施 (冷却水の運送)	実証試験実施 (冷却水の運送)	冷却水循環ポンプの運送実験、運送管の運搬、運送機材の運送実験、運送機材の運搬実験等による機器の運送実験
Na-MgO-Cl系熱傳導液 (熱傳導液の運送実験)		実証試験実施	150t級熱傳導液の運送実験として、マグネシウムオキサイド熱傳導液の運送実験、マグネシウムオキサイド熱傳導液の運送実験等による、運送機材の運送実験
循環式変換器の開発	実証試験実施 (循環式変換器の開発)	実証試験実施 (循環式変換器の開発)	循環式変換器の開発実験として、ポンプ、循環式変換器の開発実験、ポンプを内蔵した循環式変換器の開発実験等による、循環式変換器の開発実験

③ 1次冷却系簡素化のためのポンプ組込型中間熱交換器開発 (1/3)

「もんじゅ」の現状	
○「もんじゅ」では、1次冷却系のポンプ及び熱交換器が別々に配置されており、これが冷却系配管の容積増大、機器量の増大を招いている。	
技術開発の経緯	
○実用炉においては、1次冷却系の熱交換器をポンプを内蔵することにより、冷却系配管の簡素化、容量削減を行なう。建設・保守コスト低減。	
○ポンプの回転に伴う運動に熱交換器の位勢管が割れうる(位勢管の運転量が既定値内に収まる)こと、また、原子炉からの流れが位勢管に沿って流入する運動成立性があることを、模擬及び実証試験により確認することが必要。	→機器設計
今後の課題	
○現在までに、1/4スケールによる運動試験で位勢管データを収集、解析モデルを構築。	
○今後、実証試験により、位勢管運転量の検証、運動成立性の確認を行うことが必要。	
○「大型試験装置」で位勢管ポンプの実証試験が必要	



③ 1次冷却系簡素化のためのポンプ組込型中間熱交換器開発(2/3)

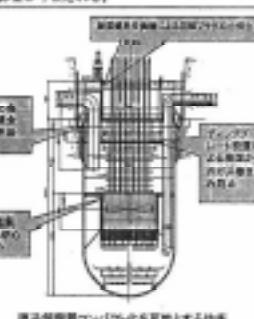
計画	2010	2011	2012
機器構造化や人材育成 DCSデータ伝送を用いた運転 監視制御 1回の最初回路に用いるポンプを アーム式	マニホールド部 ポンプ組込型熱交換器		マニホールド部 ポンプ組込型熱交換器 熱交換器本体 熱交換器サブ
自動化装置設計モデル開発 DCSデータ伝送を用いた運転 監視制御	マニホールド部 ポンプ組込型熱交換器		
実機試験装置モード開発 DCSデータ伝送を用いた運転 監視制御	マニホールド部 ポンプ組込型熱交換器 上部部材 バッフル板 熱交換器本体 熱交換器サブ 下部部材		

③ 1次冷却系簡素化のためのポンプ組込型中間熱交換器開発(3/3)

計画	2010	2011	開発内容
熱交換器アーム構造の最適化 DCSデータ伝送による運転監視制御 の開発 1回の最初回路に用いるポンプを アーム式			熱交換器アーム構造 DCSデータ伝送による運転監視制御 の開発 1回の最初回路に用いるポンプを アーム式
自動化装置モード開発 DCSデータ伝送	マニホールド部 ポンプ組込型熱交換器 上部部材 バッフル板 熱交換器本体 熱交換器サブ 下部部材		

④ 原子炉容器のコンパクト化(1/3)

「もんじゅ」の現状
○「もんじゅ」では、原子炉上部の燃料棒交換用機器が大きく、原子炉容器コンパクト化の障害となっている。
○また、原子炉容器をコンパクト化した場合、部分的に原子炉容器内のナトリウム流量が大きくなり、原子炉上部の気体を吸き込み原子炉内に蒸気を発生させる等の悪影響が予測される。
技術開発の概要
○多数の機器群が配置されている原子炉上部に接続可能な、小型の燃料棒交換用機器を開発し、実用炉に適用することにより、原子炉容器をコンパクト化し、建設コストの削減を図る。
○あわせて、ナトリウムの流速が大きくなる箇所において、原子炉上部の気体を吸き込みを防止する装置の開発が必要。
○また、コンパクト化に伴い取り扱い能力による変形と腐食が増加するため、評価手法高度化が必要。
今後の課題
○既往までに、1/10スケールによる水を用いた実証試験で、炉上部流動特性を取得している。
○今後、ナトリウムを用いた実証試験を行い、高周波数で作る原子炉容器内の流動特性把握、原子炉上部の装置の強度の確認を行うことが必要。



原子炉容器コンパクト化を可能とする技術

④ 原子炉容器のコンパクト化(2/3)

計画	2010	2011	開発内容
炉心上部機器の開発 DCSデータ伝送による運転監視制御 の開発 1回の最初回路に用いるポンプを アーム式	マニホールド部 ポンプ組込型熱交換器 上部部材 バッフル板 熱交換器本体 熱交換器サブ 下部部材		炉心上部機器の開発 DCSデータ伝送による運転監視制御 の開発 1回の最初回路に用いるポンプを アーム式
炉内熱動能開発 DCSデータ伝送による運転監視制御 の開発 1回の最初回路に用いるポンプを アーム式	マニホールド部 ポンプ組込型熱交換器 上部部材 バッフル板 熱交換器本体 熱交換器サブ 下部部材		炉内熱動能開発 DCSデータ伝送による運転監視制御 の開発 1回の最初回路に用いるポンプを アーム式
高圧絶縁部ヘリカル導管 DCSデータ伝送による運転監視制御 の開発 1回の最初回路に用いるポンプを アーム式	マニホールド部 ポンプ組込型熱交換器 上部部材 バッフル板 熱交換器本体 熱交換器サブ 下部部材		高圧絶縁部ヘリカル導管 DCSデータ伝送による運転監視制御 の開発 1回の最初回路に用いるポンプを アーム式

④ 原子炉容器のコンパクト化(3/3)

分類	年月	実現	実現	実現内容
炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、NDA-1 炉内炉管部品の簡略化			実現	<ul style="list-style-type: none"> 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、NDA-1 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化
炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化		実現	実現	<ul style="list-style-type: none"> 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化
炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化		実現	実現	<ul style="list-style-type: none"> 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化、炉内炉管部品の簡略化
炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化		実現	実現	<ul style="list-style-type: none"> 炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化、炉外炉管部品の簡略化

⑤ システム簡素化のための燃料取扱系の開発(2/3)

分類	年月	実現	実現	実現内容
燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化		実現	実現	<ul style="list-style-type: none"> 燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化
燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化		実現	実現	<ul style="list-style-type: none"> 燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化 燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化、燃料取扱系の簡素化

⑥ システム簡素化のための燃料取扱系の開発(1/3)

「もんじゅ」の現状	
○燃料交換時に炉心上部構造を炉心上部から完全に移動させる必要があるため原子炉容器	・炉心上部構造を炉心上部から完全に移動させる必要があるため原子炉容器
○素合体1体当たりの燃料交換時間が比較的長い	
○炉心吸収型EVSTでの集合体吸収体搬出の割合にEVST容積が最大	
○EVSTで燃料転換後は湿式洗浄、水抑制のうち水プール計画	
技術開発の概要	
○炉心EVSTと可変アーム型燃料交換機の組合せにより原子炉容器を大幅に縮減	
○燃料交換機動中の高遮蔽および2集合体オルターネーションによる燃料交換時間削減技術	
○捕獲ブランクおよび液注洗浄型構内導通機を使用しEVSTの負担方式を合理化	
○乾式洗浄後に水プールに直接浸漬するシステムを採用して洗浄・在器洗浄を合理化。また、これにより自洁、湿式洗浄貯液等の廃棄を低減	
燃料取扱系全体システム	

⑦ システム簡素化のための燃料取扱系の開発(3/3)

分類	年月	実現	実現	実現内容
EVSTのEVSTの簡略化			実現	EVSTのEVSTの簡略化
燃料水洗浄システムの簡略化		実現	実現	<ul style="list-style-type: none"> EVSTのEVSTの簡略化 燃料水洗浄システムの簡略化
炉内炉管部品の簡略化		実現	実現	<ul style="list-style-type: none"> 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化
炉内炉管部品の簡略化		実現	実現	<ul style="list-style-type: none"> 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化 炉内炉管部品の簡略化
炉外炉管部品の簡略化		実現	実現	<ul style="list-style-type: none"> 炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化 炉外炉管部品の簡略化

④物量削減と工期短縮のための特殊容器の開発(1/2)

「もんじゅ」の現状

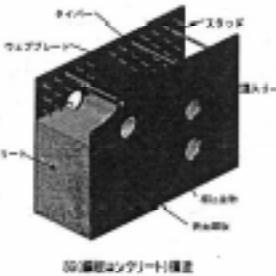
- 収納容器は従来原子炉と同じ鋼製円筒型であり容積、物量とも大きい
○搬設工事が重い

福島開発の必要

- 表面鋼筋のも／もロックとしての強度・コンクリートによる補強、により梁柱構造（SRC構造）より高い強度を実現
 - 高い強度を活かし、更なる状の節約器具を構成可能（複数層構造20%削減目標）
 - 鋼構造部材は工場生産可能、コンクリート型枠不必要な作業を持ち、建設工期約1週間可（建設工場4年→3年へ縮減）

中行金經

- 筋分モデルによる事例群(墨田)における、堅一堅(13%)複合部、堅脚複接合部、開口部、ライナ部の強度や伸びさなどの特性把握
 - 全体をモデルによる事例群、地盤特性試験結果
 - 地盤特性評価法上より柔軟性を確認評価法の開発



版權所有

⑤ 物量削減と工期短縮のための格納容器のSC清化(2/2)

The figure consists of two parts. The left part is a bar chart titled '日本における子供を持つ世帯と子供の世帯数' (Number of households with children and number of households with children under 15 in Japan) comparing 2001 and 2014. The x-axis represents the year, and the y-axis represents the number of households. The right part is a detailed diagram of a household structure labeled '日本における子供を持つ世帯と子供の世帯数' (Number of households with children and number of households with children under 15 in Japan), showing various household types and their characteristics.

②安心・静寂の開発 [照射試験] (1/2)

「もんじゅ」の開拓

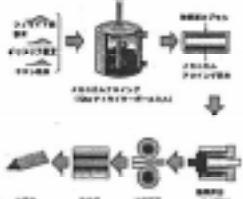
- 「もんじゅ」では、PMC319被覆型、(U,P)酸化物中空ペレット担体、低密度ビン六角ハンドル集合体を採用。
 - 被覆層のスエーリングによるビン内壁増加が耐候性の制限因子であり、炉心燃料の取出平均燃焼度設計は8万MWyr。MAは裏蓋部には含有させていない。

待續

- 耐久性・エリシング性と高強度を両立させたOOG耐候性を実現し、高強度度は平均15万M²/W²を達成する。
 - 実用化段階までUVカッティング性に加えて吸湿性・TRU吸湿・開発性・プロセス中空糸物の耐射性性能を評価する。
 - 糸糸混合方式で、またUVブラント概念の安全設計処理に適合する染色型内糸用UVブラント概念を実現。

今朝白櫻樹

- 現在までに、ODG被覆管について一部の照射試験に着手し、MA患者群のみの照射試験結果を発表した。
 - 今後、高強度度・高の性子測定量までの照射・材料照射試験、照射試験までの性能評価を行う。
 - 改進型内部ガード・拘束具体、横担固定・転外装置などを進め、照射試験による安全性を確認する。



999指揮官の懇談会

⑦ 炉心燃料の開発 [照射試験] (2/2)

③配管2重化によるナトリウム漏洩対策強化(1/3)

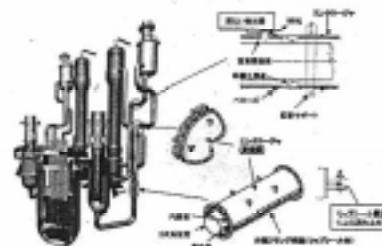
「もんじゅ」の現状

- 「もんじゅ」では、主冷却系配管は一重。このため、配管が破損すれば、ナトリウムが建屋内に漏出し、特に二次系では空気と反応し燃焼する。

技術開発の概要

- 冷却系配管が破損しナトリウムが建屋中に漏出した場合、激しく燃焼を起こし、反応生成物が建屋内に飛散するため、復旧作業に多くの時間・労力を必要とする。

- このため、冷却系配管を二重化し、二重配管の側面は気密化するとともに、漏洩を発現しておくことにより、仮に内管が破損した場合でもナトリウムの漏えい量を既定でき、かつ、燃焼・飛散を防止し、復旧作業を容易にすることが可能。



2次ナトリウム系の2重化概念

③配管2重化によるナトリウム漏洩対策強化(3/3)

会員	2004	2005	実施内容
高炉から炉内に対する20件以上の 法の導入			・新規配管は既存配管と同じ高炉から炉内に 直接接続する方法よりもコンパクトで、ガラス 繊維製の配管を用いた「Glass Fiber Reinforced Plastic Pipe」を採用する。 ・既存の炉内配管の更新を約10年以内に実施 する方針を確立する。 ・既存の炉内配管の更新を約10年以内に実施 する方針を確立する。
高炉から炉内に対する20件以上の 法の導入			
高炉から炉内に対する20件以上の 法の導入			

④配管2重化によるナトリウム漏洩対策強化(2/3)

会員	2004	2005	実施内容
複数熱管蒸発器の開発 DF活性化による漏洩防止のための 技術開発小委員会			・複数熱管蒸発器の開発 ・DF活性化による漏洩防止のための 技術開発小委員会
2重熱管蒸発器の開発 DF活性化による漏洩防止のための 技術開発小委員会			・2重熱管蒸発器の開発 ・DF活性化による漏洩防止のための 技術開発小委員会

⑤直管2重化熱管蒸気発生器の開発(1/4)

「もんじゅ」の現状

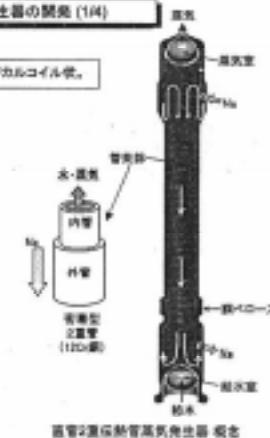
- 「もんじゅ」では、蒸気発生器内の伝熱管は一直、ヘリカルコイル状。

技術開発の概要

- 伝熱管を直管二重構造にすることにより、伝熱管の側面によるナトリウム—水の接触を防止し、ブランクの燃焼性向上を図る。
- 二重の伝熱管はヘリカルコイル管に加工できないため、蒸気発生器は「もんじゅ」に比べ大型化するものの、機能率の向上により総合的なプラントの経済性向上に寄与する。

今後の課題

- 現在実現に、小規模伝熱管の試作は実施。
- 今後の課題は、
 ①直管の二重管の試作による製造容易性を確認、流動試験。
 ②部分モデルによる伝熱流動試験による性能確認(試験は「大型試験施設」を使用予定)



直管2重化熱管蒸気発生器 概念

⑤ 直管2重伝熱管蒸気発生器の開発 (2/4)

分類	2010	2010	説明
1.直管2重伝熱管蒸気発生器の構造 2.直管2重伝熱管蒸気発生器の特徴 3.直管2重伝熱管蒸気発生器の開発	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器
第一管内流路半径の検討 ・直管2重伝熱管蒸気発生器の構造	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器
直管2重伝熱管蒸気発生器の開発 ・管内配管設計 ・管外配管設計 ・燃焼室充満率評価	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器
	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器

⑤ 直管2重伝熱管蒸気発生器の開発 (4/4)

分類	2010	2010	説明
タリウム製試験実験装置の開発 ・直管2重伝熱管蒸気発生器の構造 ・直管2重伝熱管蒸気発生器の特徴 ・直管2重伝熱管蒸気発生器の開発	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器
直管2重伝熱管蒸気発生器の開発 ・直管2重伝熱管蒸気発生器の構造 ・直管2重伝熱管蒸気発生器の特徴 ・直管2重伝熱管蒸気発生器の開発	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器
直管2重伝熱管蒸気発生器の開発 ・直管2重伝熱管蒸気発生器の構造 ・直管2重伝熱管蒸気発生器の特徴 ・直管2重伝熱管蒸気発生器の開発	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器

⑤ 直管2重伝熱管蒸気発生器の開発 (3/4)

分類	2010	2010	説明
直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器
管内-20度温度差手当	管内-20度温度差手当 管内-20度温度差手当	管内-20度温度差手当 管内-20度温度差手当	管内-20度温度差手当 管内-20度温度差手当
直管2重伝熱管蒸気発生器(直管2重伝熱管蒸気発生器) 直管2重伝熱管蒸気発生器(直管2重伝熱管蒸気発生器) 直管2重伝熱管蒸気発生器(直管2重伝熱管蒸気発生器)	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器	直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器 直管2重伝熱管蒸気発生器

⑥ 保守・維持性を考慮したプラント設計 (1/4)

「もんじゅ」の現状

○ナトリウムは圧縮・水と反応するため、容易に配管を取り外すことができない。また温度が低下すると固化するため、配管部の温度を維持する必要がある。また、ナトリウムは赤と見分けが付かないため、既存の目視検査用カメラでは、配管あるいは容器内液体物の状況に対応できない。

○こじため、保守・維持技術では、外部系配管から炉内熱供給部のナトリウムを全て抜く必要がある等、極めて手間がかかる。

技術開発の概要

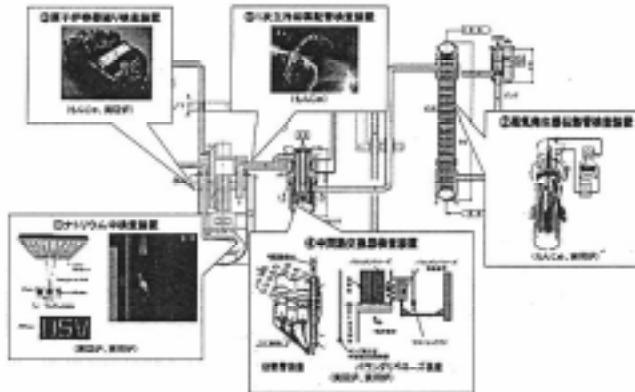
○配管内部の保守については、超音波を用いた保養技術を開発し、配管取り外し装置の手間を削減、配管表面の保守については、放射能を帯びたナトリウム内で撮影可能なカメラを開発し、既存の手間を削減。
(あわせて、保守・維持をしやすいプラント設計を実施。)

今後の課題

○現在までに、超音波探傷技術、ナトリウム内で撮影可能なカメラの技術開発見通しを得た。
○今後、実証試験による性能確認、実用性の見通し確認が必要。

○保守・維持をしやすいプラント設計については、設計上の問題であり、技術開発要無なし。

⑩保守、補修性を考慮したプラント設計(2/4) ナトリウム炉における検査技術



⑪保守、補修性を考慮したプラント設計(3/4)

分類	2010	2015	実施内容
ナトリウム炉検査装置・検査設備の開発			<ul style="list-style-type: none"> ナトリウム炉検査装置による検査装置の小形化、検査装置と連携する検査装置の開発 内筒子炉の内筒子炉の検査、外筒子炉の外筒子炉の検査 ナトリウム炉の検査装置の監視装置の開発などを含むナトリウム炉検査装置の開発
二重型過渡安全装置の開発・検査設備の開発			<ul style="list-style-type: none"> 過渡安全装置の開発、検査装置による検査装置への過渡安全装置の開発 過渡安全装置のアダプタ等の検査装置の開発
IGV遮断装置・バウンダリーポート装置・検査設備の開発			<ul style="list-style-type: none"> IGV遮断装置レバーやバウンドリーポート装置の開発

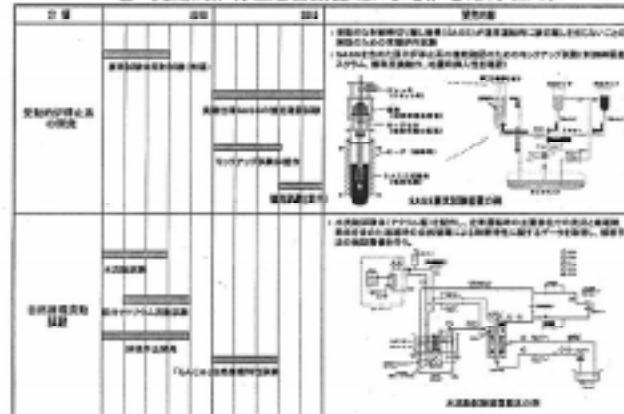
⑫保守、補修性を考慮したプラント設計(4/4)

分類	2010	2015	実施内容
過渡安全装置を用いたNa炉運転技術の開発			<ul style="list-style-type: none"> IGV遮断装置による過渡安全装置の開発 外筒子炉の内筒子炉の検査、外筒子炉の外筒子炉の検査 IGV遮断装置等の検査装置の開発
過渡安全装置の開発			<ul style="list-style-type: none"> IGV遮断装置による過渡安全装置の開発 外筒子炉の内筒子炉の検査、外筒子炉の外筒子炉の検査 IGV遮断装置等の検査装置の開発
過渡安全装置基準の制定			<ul style="list-style-type: none"> IGV遮断装置による過渡安全装置の開発 外筒子炉の内筒子炉の検査、外筒子炉の外筒子炉の検査 IGV遮断装置等の検査装置の開発

⑬受動的炉停止と自然循環による炉心冷却(1/3)

「もんじゅ」の現状
○「もんじゅ」では、非常時に炉停止のための制御操作は、電気信号によっている。(なお、炉停止後の自然循環能力は保有しているが、後射器での供給が必須)
技術開発の観点
<ul style="list-style-type: none"> ○非常時に炉停止のための制御操作を、受動的(バシブ式)システムとし、すでに「もんじゅ」でも採用している自然循環能力と併せ、電気停止(外部電源喪失)時に確実に炉停止・冷却を行えるシステムを開発し、非常時の安全性をさらに向上。 ○受動的炉停止システムとして、炉芯が一定以上の温度(キュリー点)に達すると磁力を失う性質を利用して、制御停運中に磁石を行い、炉心過熱時には制御棒が自動的に炉内に挿入されるシステム(BA555)を構築。
今後の課題
<ul style="list-style-type: none"> ○現在までに、BA555炉外回路及び導線を用いた実験試験は終了。 ○今後、材料の照射試験により強度性を確認。 ○自然循環による崩壊熱除去性能の確認、評価手法の確立が必要。

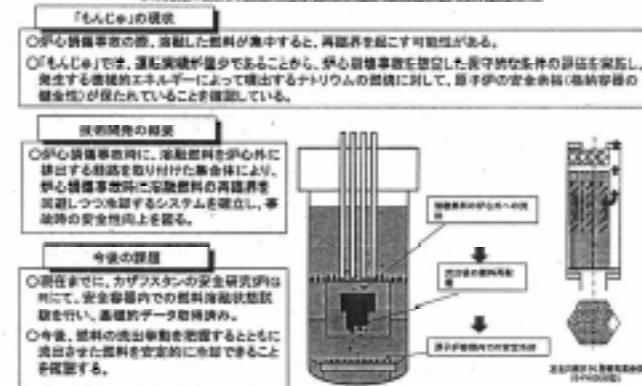
⑪ 受動的炉停止と自然循環による炉心冷却(2/3)



⑪ 受動的炉停止と自然循環による炉心冷却(3/3)



⑫ 売心損傷時の再臨界回避技術(1/3)



⑫ 売心損傷時の再臨界回避技術(2/3)



② 妊心損傷時の再臨界回避技術(3/3)

③ 建築の3次元免震技術(2/2)

分類	2010	2010	製造内容
3次元測定装置の販売	大型装置用 センサ 3Dセンサ 測定装置 3D測定装置 測定装置	3Dセンサ 測定装置 3D測定装置 測定装置	高精度な三次元測定装置(3D測定装置)、センサ、機器等の販売 ・測定装置 ・センサ ・機器等の販売
中心軸受け評価平准化装置	三次元測定装置 三次元測定装置 評価装置 評価装置		三次元測定装置 評価装置 評価装置

◎複層の3次元効率技術(12)

「私心」の思想

◎一般社水野は耐震設計、「もんにゅ」でも耐震設計を採用

酒豪の妻

今後の課題
○今後、脱炭素化途の開発・試作を行い、基準化のための確認試験を実施する必要がある。
○燃費競争力の維持強化を実現し、顧客の利便性評価手法を開発する必要がある。



總覽 | 索引 | 版權頁

今昔の脚本

○今後、3次元免震構造の開発・試作を行い、基準化のための確認試験を実施する必要がある
○低料率集合体の耐震強度試験を実施し、伊丹の耐震性評価手法を開発する必要がある。

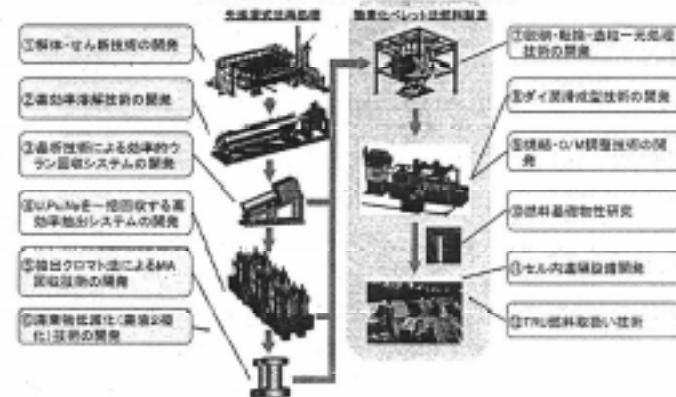
添付資料5

2015年までの研究開発計画
—主課題:先進還式法再処理+粉末化ペレット法燃料製造—

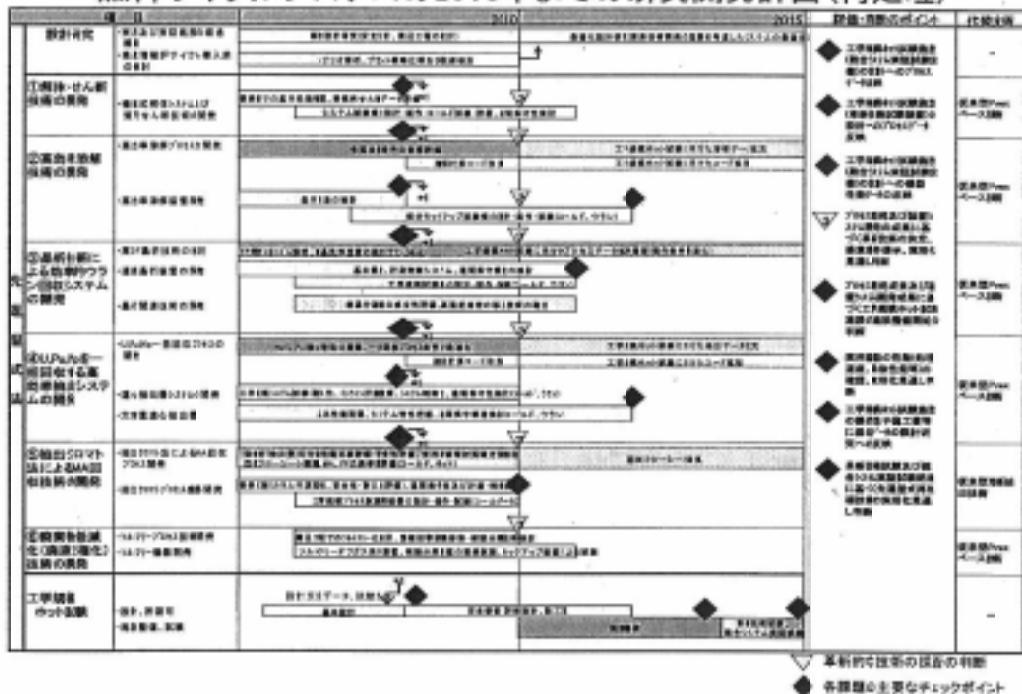


燃料サイクルシステムに関する2015年までの技術開発課題

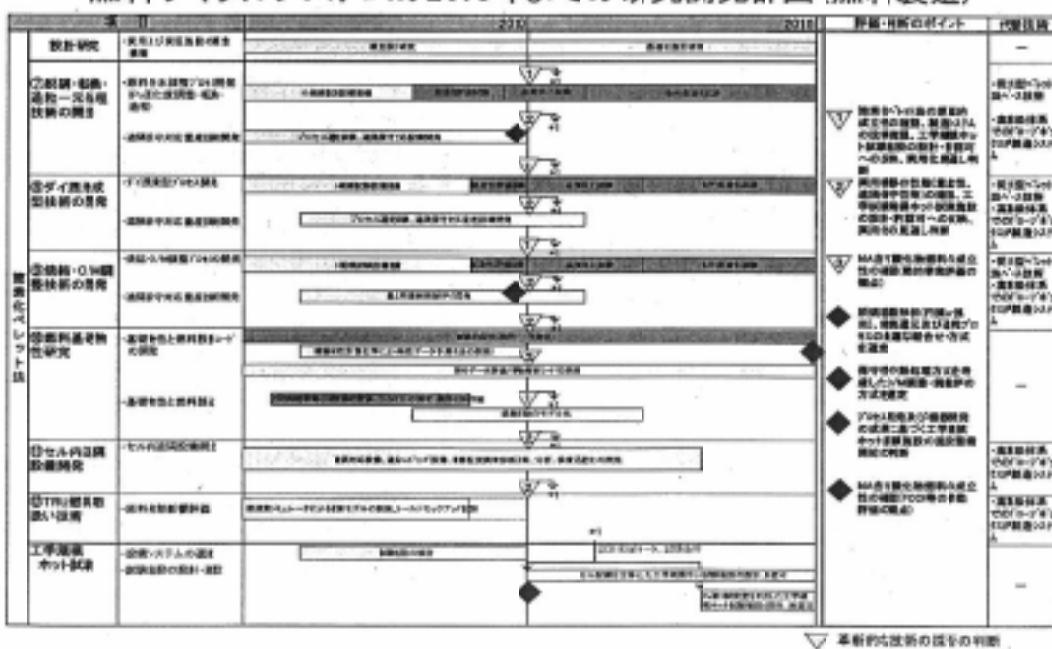
(先進還式法再処理+粉末化ペレット法燃料製造)



燃料サイクルシステムの2015年までの研究開発計画(再処理)



燃料サイクルシステムの2015年までの研究開発計画(燃料製造)



燃料サイクルシステムの設計研究

これまでの設計研究成果

- 主工場の最小化に取り組んで設計を実現し、開発目標を満たす可能性を有する技術基盤200kgの燃料サイクルプラントを構築した。
- 高濃度廻りサイクル導入段階に関する整備シナリオを設定と開発する検査評価を実施し、プラント運転や核材料機器両者間に必要な新たなリスクセイム、障害などを検討した。

今後の設計研究の課題

- 工学開発への試験
 - 燃料サイクル実証運営の目的に直結させるために、審査技術課題の追跡状況を考慮して再開発及び燃料開発の工学開発のペルソナルモードをそれぞれ早期に実現
 - そのために、実験施設として安全機能を受けるための基本設計を実現
 - 既存の既存の技術に関する技術も満足可能で、事前立会式の取扱い範囲、装置の構造
- 燃料サイクル実証実験
 - フェーズⅡ以降で実用化する基本設計のベースとなるよう、実証に必要なプロセス及びプロセスの構造、高濃度化などを具体的に定めることを検討
- 2020年頃の費用とを目標とした燃料サイクル実用実験
 - 安全設計、施設工場の設計、審査技術成果を取り込んだプロセスサイクルシステムの最適化
 - 設備の選定・設計動向を踏まえ、実証堆燃料サイクルへの航行期の適用性シナリオを検討
 - シナリオ分析を基に、板状炉、高濃度、ブルーサーフル燃料を各項的に選択できるプログラムの作成
 - 代替技術等の評価とプラントへの適用可能性の検討

燃料サイクルシステムの設計研究計画

分類	2010	2011	2012年度
1. 基本技術開発の実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
1.1 実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
1.2 実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
1.3 実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
2. 高濃度廻りサイクル実用化の検討	シナリオ検討	シナリオ検討	シナリオ検討
2.1 シナリオ検討	シナリオ検討	シナリオ検討	シナリオ検討
2.2 シナリオ検討	シナリオ検討	シナリオ検討	シナリオ検討
2.3 シナリオ検討	シナリオ検討	シナリオ検討	シナリオ検討
3. 安全設計	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
3.1 安全設計	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
3.2 安全設計	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
3.3 安全設計	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
4. 施設設計	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
4.1 施設設計	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
4.2 施設設計	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
4.3 施設設計	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
5. 計画的実証実験	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
5.1 実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
5.2 実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
5.3 実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
6. 実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
6.1 実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
6.2 実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証
6.3 実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証	実証堆燃料実証

2005年までの設計研究の成果 一回路程度200tの燃料サイクルプラントの概念図



再処理工学規模ホット試験施設

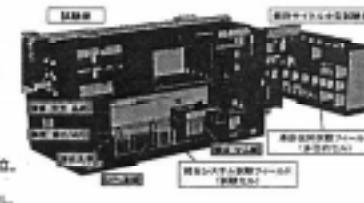
再処理工学規模ホット試験施設の実証目標及び燃料サイクルシステムに関する工学基盤を改修設計から実施する。今後この工学基盤の実証目標、安全機能、技術設計、建設が実現すれば、今後実証の基盤技術やシステム、フレームに関する技術や運営、保守に関する実証データを蓄積して、実証堆燃料サイクル実験の設計に実施する。

[設計]

- 実験用燃料（～0.1kg/t以上）の供給装置を要する。実験技術（最初、堆積ウロト等）について投資実証でのホット試験（実験料約10kg/t）を行い、実験用燃料や各種装置を改修して最初の工学基盤までの技術データを蓄積する。
- 実験用燃料の運搬、堆積等の一連の工学基盤式堆積炉（セシス）システムとして構成したホット試験（実験用燃料）を行なう。実験用炉に向けた実験データを蓄積するとともに、技術確立を目指す。

[初期実験内容（T1）]

- 堆積技術の小規模試験（1kg/t程度の使用能力）
 - 堆積技術のR&D
 - MA回転炉用ウロトマトラリー・回転炉RSD
 - その他の堆積技術に関するR&D
- 堆積システム用ホット実験試験（10kg/t程度堆積能力）
 - 堆積・セル網から炉内等、一連の先進堆式炉（セシス）の工学基盤における堆積システムを実験。
 - 堆積、回転の運搬機能、プロセス耐摩耗性等のプロトタイプ技術に着目する観察や観察回数達成までの見通すための評価データの収集、および技術の確立。
- MA燃料の燃料供給
 - 試験により得られるMA（Pu, Am, Cm）を回収し、燃料回収工学基盤ホット試験施設へ供給。



【再処理工学基盤ホット試験施設の概念】

燃料製造工学規模ホット試験施設

燃料製造に関して、TRU燃料を扱う複数化レット店の自動燃料製造システムや燃料保守・修理に関する2020年頃から工学技術で技術を実施する。そのために、セル種別化と自動化技術の概念設計、基本設計を実施する。

- (技術)
 - ・粗粒度TRU燃料を対象とした製造設備の自動操作性及び過誤保守機能の実証
 - ・長時間TRU燃料燃料集合体の製造(1t HWR程度)

- (研究開発実施内容(実証))
 - ・危険度TRU燃料によるセル内過誤保守の実証
 - ・危険度TRU燃料によるセル内過誤保守の実証
 - ・過誤対応製造設備の実証
 - ・保守・修理技術の実証
 - ・新たな検査技術を用いた品質管理の実証
 - ・放射影響の確認



ホット工学試験設備(セル内過誤保守)配置概念の一例

設計研究に関する2010年の成果

1. 採用する各革新技術の決定

要素技術開発において実施するホット試験による原理の確認やコード試験による工学規模へのスケールアップ見通しの確認などの成果を基に、常用燃料サイクル施設に適用する革新技術の成り立ちは見極める。具体的には、革新技術を含む技術設計にて、設計要素への適合の可否を判断する。なお、代替技術等についても比較評価し、その適用性を検討する。

- ・運転管理方法(運転手順、制御などを含む)
- ・安全設計(構造、試験の物性データなどを含む)
- ・保守・修理方法(過誤ハンドリング技術の適用などを含む)
- ・設計要求への適合と代替技術等との比較評価



2. 精水炉サイクルから高濃縮堆炉サイクルへの移行期の検討

移行期に必要な精水炉再処理技術に関する検討を実施し、2010年からの国際的データを提供する。

- ・シナリオ解析、評価
- ・精水炉再処理に関するプロセス技術概念の提出と評価
- ・高濃縮堆炉燃料新規燃焼との共用の検討
- ・次世代精水炉再処理技術に関する2010年以降の研究開発計画

設計研究に関する2015年の成果

1. 実証燃料サイクル施設(再処理+燃料製造)の概念設計

2020年頃から実施する実証燃料サイクル施設のプロセス及びプラント概念について検討する。再処理に関しては、施設の概念設計で以下の且述情報を要請し、2015年以降に実施する基本設計に反映させる。

- ・プロセスフロー図(計画などの運営や重視のプロセス及び確認などの成績を反映)
- ・物質収支、燃料費収支(計画などの運営や重視のプロセス及び確認などの成績を反映)
- ・主要機器仕様、運転計(機器の仕様、保守・修理方法の実証結果を反映)
- ・経済性、運転費収支(機器の仕様、保守・修理方法の実証結果を反映)
- ・主要プロセスの削除計(機器の運転費収支などに照して除外し、実証を考慮する)

など

燃料製造に関しては、プロセス開発は進むものの、主な工学規模の装置開発がそれほど(計画としていることから)、プロセス開発するフロー毎や物質収支などに照して除外し、実証を考慮する。

2. 実証燃料サイクル施設再処理+燃料製造の概念設計

基本設計の決定を含めてプロセス全体の概念に関して検討し、2020年頃の実証燃料サイクル施設における運営とその費用と運営サイクル時間の妥当性を検討する。また、今後、部分開発的な段階において運営の実証を含めた運営実証を含むため、運営可能性について検討する。

- ・主要なプロセス技術(1回(計画などの運営や重視のプロセス及び確認などの成績を反映))
- ・主要物質収支(計画などの運営や重視のプロセス及び確認などの成績を反映)
- ・主要機器仕様、運転費収支(機器の仕様、保守・修理方法の実証結果を反映)
- ・経済性、運転費収支(機器の仕様、保守・修理方法の実証結果を反映)
- ・代行技術等の適用可能性の検討

3. 実用化までの研究開発計画の示す

① 解体・せん断技術の開発 (1/2)



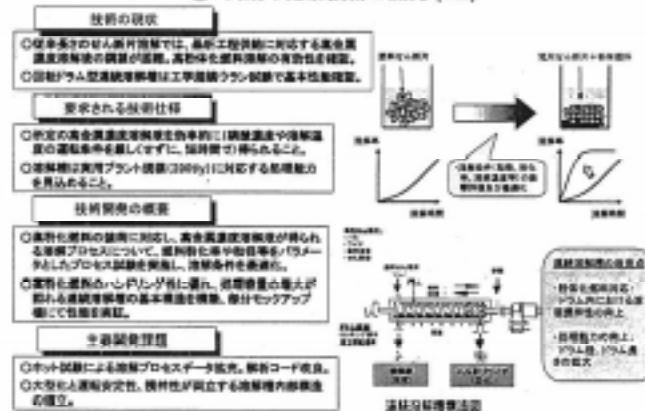
① 解体・せん断技術の開発 (2/2)

会員登録	会員登録	会員登録
機械式操作シナリオの蓄積 -実験室による基本操作用訓練装置 -シナリオ生成装置	操作 蓄積 実験シナリオの蓄積 実験データの蓄積	実験装置によるシナリオ実験、操作シナリオ実験 シナリオ実験による操作装置各部レベルにて、操作装置各部の動作特性の蓄積 過誤発生時の蓄積、実験設計・蓄積
-過誤発生実験装置 -蓄積 -工事経験(五十回程度)へ実験装置 -設計 -蓄積		
操作員シナリオ試験装置の蓄積 -実験室による基本操作訓練装置 -蓄積装置によるシナリオ蓄積 -シナリオ生成装置	設計 蓄積 設計(CORE-4), 訓練 訓練データの蓄積	1. 対象装置(現地の実験装置)にてシナリオ実験の実施と蓄積 2. 対象装置によるシナリオ実験(シナリオ実験装置)にて、操作装置各部の動作特性の蓄積 3. 過誤発生時の操作装置の動作特性和実験設計・蓄積
-過誤発生実験装置 -実験装置によるシナリオ蓄積 -蓄積		

② 高効率溶解技術の開発 (2/2)

	2010	2011	実施部門
実施率超過割合セミ定期 ○既存機器の改善看板 ○工事期間の工事算定に向けた データ整備試行 ○運転計画コードの登録 ・財務報告の改善、設備改善看 板化 ○工事期間の工事算定に向けた 実験			<p>The diagram illustrates the relationship between the implementation items listed in the table and the results of the trial run. It shows a central box labeled '実施率超過割合セミ定期' (Semi-regular exceedance rate implementation) connected to several other boxes representing different trials and improvements.</p>
実施率超過割合定期 ○基本実績の算定 ○壁セッタアップの確認 ・算定 ・算定 ・実績(コムルガウラシ) ・実績化の基本設計 ○実績(工事期間の工事算定) ・算定 ・実行			<p>This diagram shows the relationship between '実施率超過割合定期' (Regular exceedance rate implementation) and '実績化の基本設計' (Basic design for standardization). It also includes a circular diagram with arrows indicating a process flow from one stage to another.</p>

② 高効率溶解技術の開発 (1/2)



③ 晶析技術による効率的ウラン回収システムの開発 (1/2)



③ 晶析技術による効率的ウラン回収システムの開発(2/2)

④ U,Pu,Npを一括回収する高効率抽出システムの開発 (1/2)

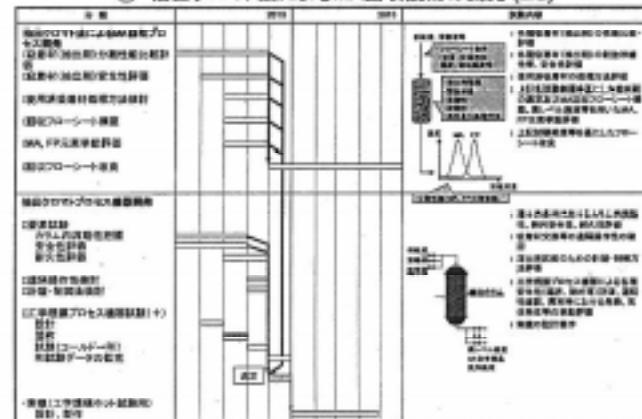


④ U,Pu,Npを一括回収する高効率抽出システムの開発 (2/2)

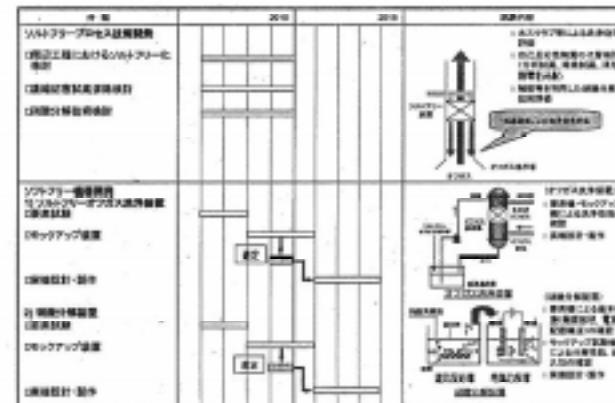
⑤ 抽出クロマト法によるMA回収技術の開発 (1/2)



⑤ 抽出クロマト法によるMA回収技術の開発 (2/2)



⑥ 廃棄物低減化(廃液2極化)技術の開発 (2/2)



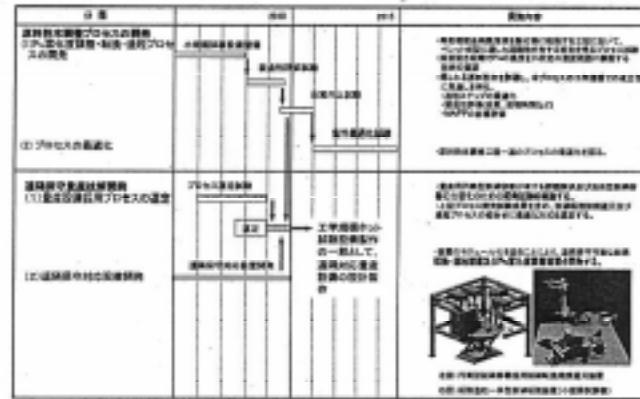
⑥ 廃棄物低減化(廃液2極化)技術の開発 (1/2)



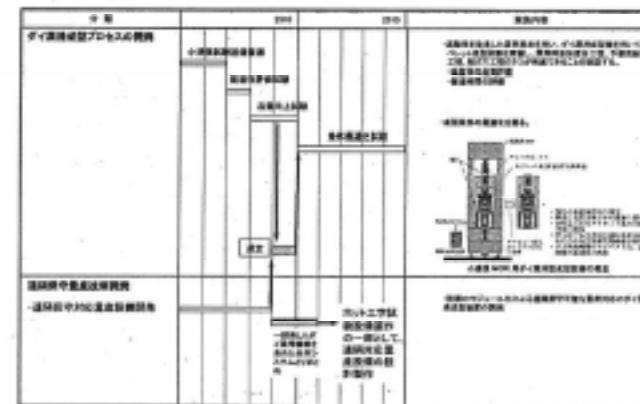
⑦ 脱硝・転換・造粒一元処理技術の開発 (1/2)



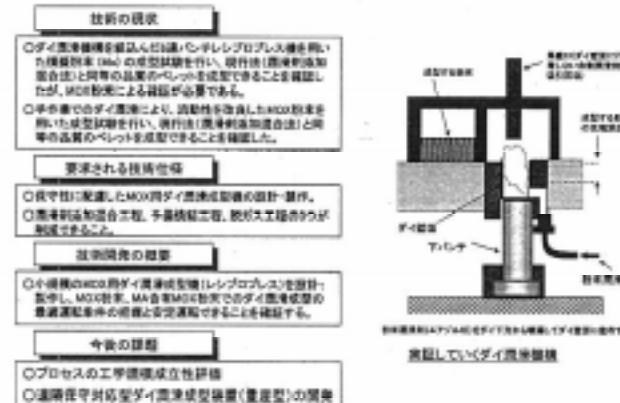
⑦ 脱硝・転換・造粒一元処理技術の開発(2/2)



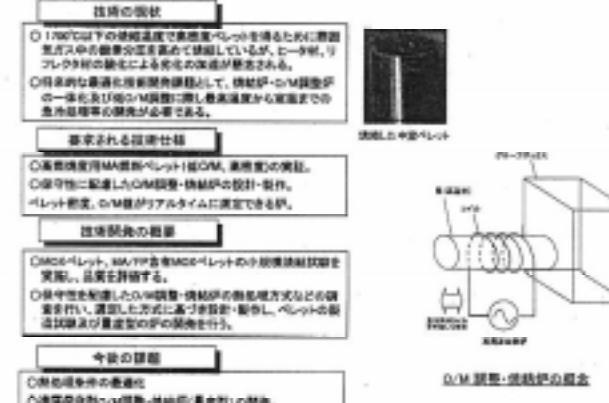
⑧ ダイ潤滑成型技術の開発(2/2)



⑨ ダイ潤滑成型技術の開発(1/2)



⑩ 焼結・O/M調整技術の開発(1/2)



⑨ 焼結・O/M調整技術の開発(2/2)

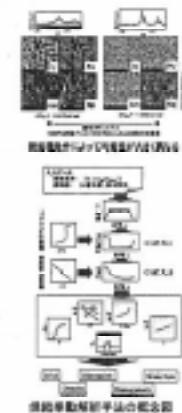
計画	201	205	実施方針
焼結・O/M調整コード開発	小規模試験設備	実験炉設備	実験炉設備を用いて、O/M調整技術を確立する。 →実験炉設備の運転と並行して、O/M調整技術を確立する。 →実験炉設備の運転と並行して、O/M調整技術を確立する。
過熱器中温部技術開発	実験炉設備の運転	実験炉設備の運転	実験炉設備の運転と並行して、過熱器中温部技術を開発する。 →実験炉設備の運転と並行して、過熱器中温部技術を開発する。

⑩ 燃料基礎物性研究(1/3)

技術の現状
○基礎物性データが十分に蓄積されていないため、燃料設計上のマイナーアクニグ光源の影響が精度良く評価できず。
求められる技術仕様
○マイナーアクニグ元素を含むMOX燃料の照射挙動を精度よく評価でき、合理的、経済的な燃料設計が可能ること。
技術開発の趣旨
○燃料設計に必要な基礎物性データについて実験及び理論的に整理し、モデル化を行う。得られた特性モデルを用いて解析コードを開発する。
今後の課題
○照射実績が無い広範囲の燃料組成、照射条件でも精度可測となるよう、理論的に裏づけのある実験解析コードを開発する。

⑪ 燃料基礎物性研究(2/3)

技術の現状
○製造条件からO/M、密度、寸法などの燃料仕様をシミュレーションできる技術は無く、移動的な手法により制約条件を決定している。
求められる技術仕様
○グリーンペレット特性及び焼結失敗と関連したペレットの荷重経歴、O/M、密度、寸法、均質性を評価することによって効率的、迅速的な燃料製造技術を開発する。
技術開発の趣旨
○製造炉中のペレット内の様子を温度、時間、荷重経歴として速度的評価を可能とするため、基礎物性データを幅広く取得する。
今後の課題
○グリーンペレットから焼結が進む過程と焼結が進んだ過程を分けてデータ収集及びモデル化を行い、基礎物性データと合わせて蓄積をす。



⑫ 燃料基礎物性研究(3/3)

計画	201	205	実施方針
基礎物性と燃料設計コードの開発	実験炉設備	実験炉設備	実験炉設備と並行して、基礎物性蓄積を実施する。 →実験炉設備と並行して、基礎物性蓄積を実施する。
実験炉設備	基礎物性データ庫	基礎物性データ庫	実験炉設備に蓄積データを蓄積設備で構成する。
設計・算定コード開発	基礎物性データ庫	基礎物性データ庫	→実験炉設備と並行して、基礎物性データを蓄積する。

計画	201	205	実施方針
基礎物性と燃料設計	実験炉設備	実験炉設備	実験炉設備と並行して、基礎物性蓄積を実施する。 →実験炉設備と並行して、基礎物性蓄積を実施する。
実験炉設備	基礎物性データ庫	基礎物性データ庫	実験炉設備に蓄積データを蓄積設備で構成する。
O/M調整技術の評価	実験炉設備	実験炉設備	→実験炉設備と並行して、基礎物性蓄積を実施する。
・燃焼器内温度分布	実験炉設備	実験炉設備	→実験炉設備と並行して、基礎物性蓄積を実施する。

⑪ セル内遠隔設備開発 (1/2)

技術の現状	
○既存のTRU燃料の運搬は、運搬車両のセル構造改修が必要となるが、JFEスチールニッケル熱電堆装置の運搬車両より日本技術院MHIの技術革新性の高い車両はグローバルスタンダードであるため、完全な運搬車や輸送方法の改善には向っていり、販売可能な技術としては、荷役自動化、荷役装置用機器類等の機械技術があるが、顧客価値が大きい開発技術の運搬車両改修に開発技術が存在する。	○荷役社認定のための分析、輸送技術開発が必要である。
○荷役試験装置などを基本型式で実施。	
要求される技術仕様	
○セル内遠隔操作装置をジユール開閉、モジュール交換に最適化したコットアーム、材料をリールを分離移動する車両自由度ミニフレームの開発。	
○重量計測のための荷重分離、ペレット積荷技術開発。	
技術開発の概念	
○コントローラーを中心とした遠隔操作装置、モジュール交換に最適化したコットアーム、材料をリールを分離移動する車両自由度ミニフレームの開発。	
○コンテナ内遠隔操作装置を中心とした遠隔操作装置、フレーム構造の開発。	
○車両の開発	
○遠隔による保守・検査の概念	
○遠隔ハンダリング機器開発の実施、ホット切削技術による実証	



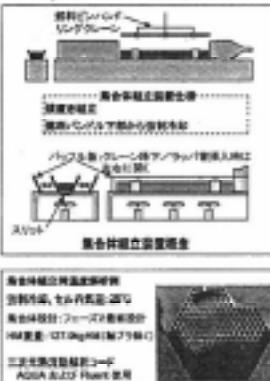
⑪ セル内遠隔設備開発 (2/2)

技術	2015	2016	実施内容
1. 遠隔操作装置開発			-遠隔操作装置を構成し、モジュール化技術の開発、遠隔操作装置の構成、リリース装置
2. 遠隔ハンダリング装置開発			-遠隔操作装置の構成、遠隔ハンダリング装置の構成、モジュール化技術の開発、遠隔ハンダリング装置
3. 荷役装置開発技術開発			-遠隔ハンダリング装置開発、モジュール化技術の開発、遠隔操作装置の構成
4. 分割、積荷計測技術開発			-荷役装置開発技術開発、遠隔ハンダリング装置開発、モジュール化技術の開発
5. 3D位置感覚装置による荷役技術開発			-遠隔操作装置の構成、遠隔ハンダリング装置の構成、モジュール化技術の開発
遠隔操作装置開発(モジュール化技術の開発)			



⑫ TRU燃料取り扱い技術 (1/2)

技術の現状
○JFEスチール開発の温度評価についてこれまでに、もんじゅ燃焼炉やモックアップ装置からの供給、計算コードを用いた温度算出を行った。
○西日本十本の燃焼炉と燃焼炉に導かれたカーリングワイヤで仕切られた瓦斯路は點火が複数で、詳細なモデル化が難しく、今後の目標評価が必要である。
技術開発の目標
○燃焼炉における温度データによる計算モデルの構築。
○モックアップによる燃焼炉の確認。
技術開発の概要
○燃料混合体内部路の典型的な形状に対し詳細な先進計算モデルを構築する。
○燃焼炉混合体における燃焼モデルを導入したコードモックアップの燃焼炉を作成し、燃焼炉の確認をする。
今後の課題
○燃料サイクルシナリオに応じて複数の先進的燃料に対する、後段モデルによる温度分布評価。
○高負荷燃焼炉に対する混合体燃焼装置の設計への反映。



⑫ TRU燃料取り扱い技術 (2/2)

技術	2015	2016	実施内容
1. 遠隔操作装置による荷役開発			-遠隔操作装置による荷役開発
2. コードモックアップ開発			-混合体燃焼装置および燃焼炉モデルを構成したコードモックアップ開発

GIFと実用化戦略調査研究の設計要求の比較



④技術要求レベルの比較【資源有効利用性・環境負荷低減性】

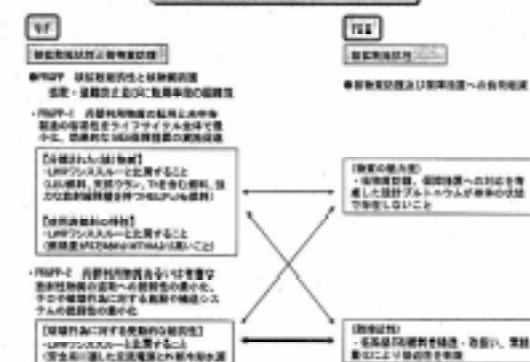


4. 頭部腫瘍を主徴としている、下顎部多発結節で診断された頭部疾患として小脳腫瘍の
診断基準を満たす症例が、本邦ではこれまで報告されていなかった。この症例は頭部腫瘍で小脳腫
瘍を疑い、MRI、CT、頭部多発結節の診断基準を満たす症例である。
（参考文献）
1. Head and Neck Tumors: A Diagnostic Approach by Bradley; First Edition
Screening Evaluation Indications and Results.)

第6章 要素派の比較（明治世）



新幹線開通10周年記念「旅情歌謡」



・ 2007年版基準レベルとして、下記算式を用いてトランザクション処理時間と標準化された参考値との差を算出し、その差が±10%を超える場合はレバーハンズの評議会に報告する。これで標準化された実際の取扱い手数料が算出される。